



Title	ベトナム戦争と仏米同盟：「中立化」構想をめぐる ドゴール外交の展開
Author(s)	鳥潟, 優子
Citation	大阪大学, 2003, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/44182">https://hdl.handle.net/11094/44182</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていない ため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利 用をご希望の場合は、<a href="https://www.library.osaka- u.ac.jp/thesis/#closed">大阪大学の博士論文につい て</a>をご参照ください。

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	と 鳥 名 か 満 ゆ 優 こ 子
博士の専攻分野の名称	博 士 (国際公共政策)
学 位 記 番 号	第 1 7 9 5 7 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 15 年 3 月 25 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 1 項該当 国際公共政策研究科国際公共政策専攻
学 位 論 文 名	ベトナム戦争と仏米同盟－「中立化」構想をめぐるドゴール外交の展開 －
論 文 審 査 委 員	(主査) 助教授 星野 俊也  (副査) 教 授 黒澤 満 教 授 米原 謙 助教授 ロバート・エルドリッチ

### 論 文 内 容 の 要 旨

ベトナム戦争に関する研究は、1970 年代からアメリカでいち早く外交文書が公開されたために、これまで主にアメリカ側の見方に基づいてなされてきた。そのため「冷戦史の多角的な再検討」という冷戦後の学問的潮流も念頭におきながら、歴史研究には複数の当事者のバランスがとれた見方が重要であると考え、本論文ではベトナムの旧宗主国であったフランス側の視点から、ベトナム戦争と仏米関係の研究に取り組んだ。

ここでは「アメリカのベトナム戦争をめぐるドゴール外交」に焦点を合わせ、これまでのベトナム戦争研究においては、専らアメリカ外交批判という側面に重点がおかれてきたドゴールのベトナム政策の主眼が紛争の平和的解決にあったということを、仏米両国の外交文書に基づいて実証的に検証した。つまりドゴールのいわゆる「ベトナム戦争批判」とは、フランスにしてみれば、同盟国アメリカに対して勝利が見込めない戦争から撤退し、和平交渉を始めるように促す「助言」であったと考察したのである。ドゴールはアルジェリア戦争の政治的解決の経験に基づいて、戦後、国家建設を熱望する旧植民地の民族主義がどれほど強力であるのかを理解し、ベトナムでアメリカの勝算の見込みはないと考えていた。そのためドゴールは、アメリカがベトナム戦争を泥沼化させ、アジアの不安定要因を醸成し、ひいては世界に全面戦争の脅威を感じさせるのであれば、アメリカが面子を立てた形で撤退する手段を提示した方がフランスの利益にもなり、かつ紛争解決にフランスが貢献することはその外交的威信を増進できると考えたのであった。

しかし、これに対するアメリカ側は、ドゴールの言葉を額面通りには受けとらなかった。そのみならず、アメリカはフランスが過去に失敗した地域でアメリカが成功するのを望まず、妨害しようとしていると反発し、あるいは、フランスがインドシナや世界政治における威信を高めるためにアメリカを非難しているのに過ぎないなどを見なしていた。このように、それぞれの国家では視点が異なり、かつ仏米両国の世界観や指導者像、あるいは自国の外交目標というバイアスを通じて相手国の意図を勘案しがちであることも、本論文では考察した。

さらに、ドゴールのベトナム政策は、そこに世界をどのようにしたいかという「ビジョン」があったことも明らかにした。ドゴールは2つの大戦の教訓から、米ソによるブロック対立が戦争を生み出す要因になると考え、冷戦の緊張緩和による平和の継続を目指した。そのためには世界の「均衡」を図る必要があると考えて、「東方外交」にも着

手していた。国益に基づいて理念を追求する戦略があつてこそ、同盟もまた外交のオプションを拡大する道具として有益に使えるという政策的インプリケーションを、本論文ではドゴールのベトナム政策から導き出した。

### 論文審査の結果の要旨

鳥潟優子の博士申請論文「ベトナム戦争と仏米同盟－『中立化』構想をめぐるドゴール外交－」は、従来、米国の外交文書を用い、米国側の見方からの分析が中心であつたベトナム戦争研究に関し、多くの一次資料を含むフランス側の資料をも重視し、ドゴール外交の再評価と冷戦史・ベトナム戦争史の再検討を目指した労作である。本論文は、国際公共政策としての国際安全保障政策研究の一環として、特に仏米同盟の分析としても有益な示唆を提供している。

本論文は、仏米関係の歴史的展開と同盟関係の変遷を検討した序章に続き、ベトナム戦争の政治的解決に向けたドゴール仏大統領の外交について、同大統領が提起した「中立化」構想や仏の和平工作を中心に、5章にわたって詳細に分析している。第1章は、ドゴール大統領がベトナム戦争の平和的解決のための唯一の手段として提案するが米国に拒絶されたベトナム「中立化」構想の内容を同大統領の世界戦略やインドシナ観との関係で詳しく再検討する。第2章は、ドゴールの米国外交批判の背景や戦略的思考を議論する。第3章は、ベトナム戦争がエスカレートするなかで試みられた和平工作のための仏の初期的努力や、同時期に進められた仏の NATO 軍事機構からの脱退や「東方外交」の動きとの関係を分析している。第4章は、仏が関与した2つの和平工作の検討を通じ、ドゴールの意図を考察している。第5章では、ドゴール構想をめぐる仏米間の認識の乖離の要因を全体の流れのなかで再度検討し、従来、反米的な批判と一般に解釈されていた仏の行動のなかに独自の国益観や同盟観や仏米間の「暗黙の協調」ともいえる側面をあぶりだしている。

外交史研究の手法を用いながら現代の国際公共政策課題にも多くの示唆を与える研究として博士（国際公共政策）の学位論文のレベルに達していると判断した。